東南アジア研究　35巻4号　1998年3月

エスニック・シンボルの創成
――西南中国の少数民族トン族の事例から――

兼　重　　努*

Creation of an Ethnic Symbol: Case of the Dong Nationality in Southwest China

KANESHIGE Tsutomu*

The People's Republic of China is one of the few countries with an official definition of ethnic groups. Most of the official nationalities were created and begun to be introduce to Chinese society in the 1950s. Now some nationalities are given ethnic symbols by outsiders, for example, drum towers and wind and rain bridges as symbols of Dong nationality.

This paper tries to explain how the ethnic symbols of Dong nationality were born and have prevailed in Chinese society, mainly by analysis of articles in Chinese newspapers, periodicals and books on Dong nationality, and examination of the process and influence of the exhibition of Dong ethnic architecture and customs held in Beijing in 1985. From these analyses three points become clear.

(1) There are mutual interactions between the center and the peripheral elites of Guizhou Province. Appeals by the peripheral elites to the center for purpose of improving their stigmatized regional identity are especially important.

(2) There also are competitions for symbol which based on regional ethnic identity among local Dong elites. The local Dong elites of Guizhou Province want to claim superiority over other Dong by emphasizing that the drum towers are the local ethnic symbol of the Dong of Guizhou Province.

(3) On the other hand, according to Chinese ethnological theory, it is thought that all members of the same nationality should have / have had a common culture and language. It is applicable to the case of Dong nationality.

はじめに

中華人民共和国では1953年以降，各地方で不統一にカテゴライズされていた雑多な非漢民族が，スターリンの四つの民族定義にもとづくとされる民族識別工作により，現在の55の「少数民族」に分類され，[1] 多民族国家中国の国民として公式に位置付けられた。国家は中国社会に

* 京都大学大学院人間・環境学研究科；Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University, Konoecho, Yoshida, Sakyo-ku, Kyoto 606-8315, Japan

1）1953年にまず37の少数民族が確定し，1954年から65年にかけて17の民族が確定し，1979年にジノー族が認定されて現在55の少数民族が確定している［郝 1994:143］。

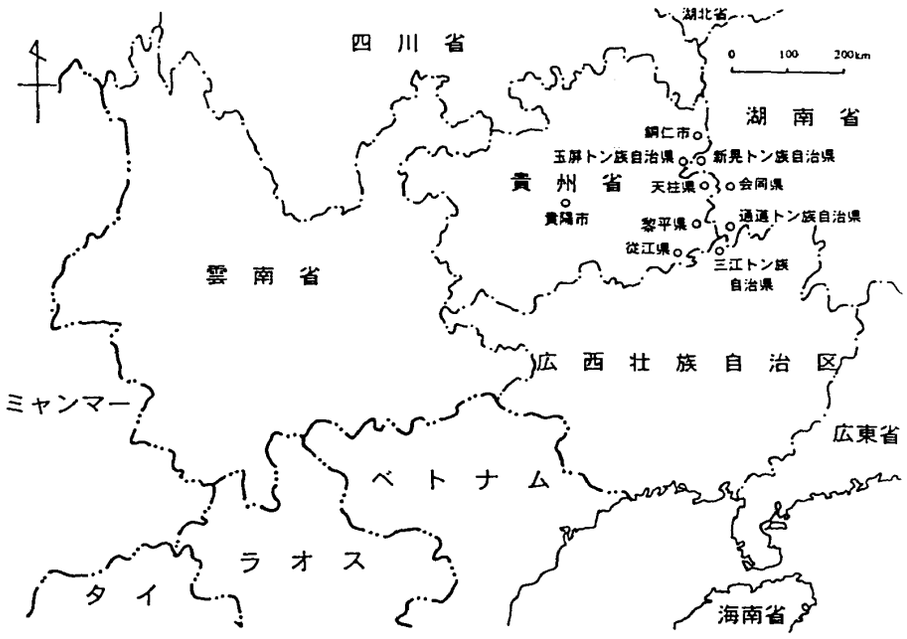

図1

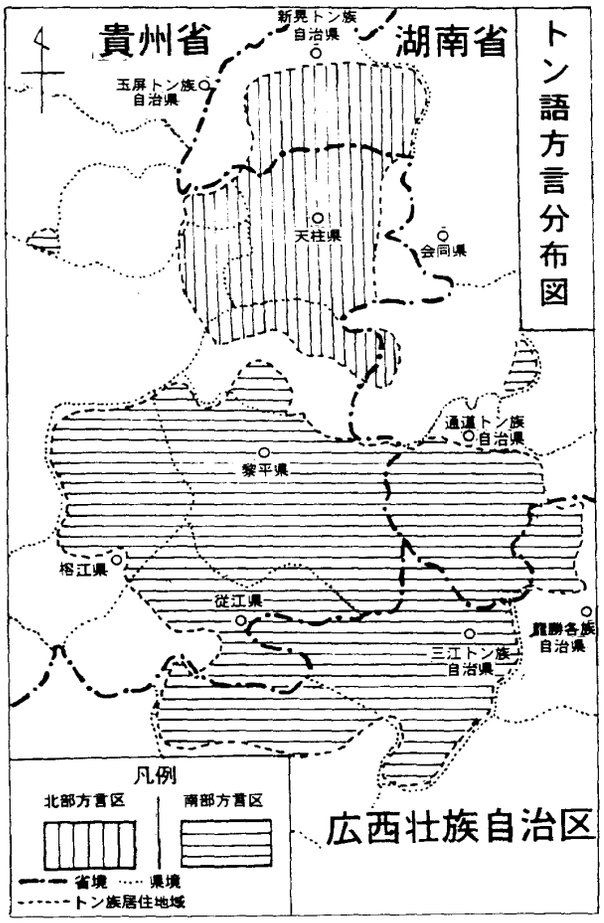

図2　トン語方言分布図

出所：「侗語方言示意図」[梁敏 1980:81]（尹文成絵）に，一部手を加えて作成。

注：分布図は1980年の時点（民族識別補充調査の前）のものである。当時は会同県や玉屏県（現在の玉屏トン族自治県）などはトン族居住地域とみなされていなかった。なお図中での行政区域名は1997年現在の名称を用いた。

むかって「少数民族」の存在を周知させる必要があった。そのため，「少数民族」に関する展覧会を開いたり，マスメディアをつかった紹介を行った。

現在，いくつかの「少数民族」に対して特定の文化要素が特に強く結び付けられて連想されている。たとえば，白（ペー）族の「本主信仰」[横山 1990:96]，トン族の「鼓楼」・「風雨橋」などがあげられる。これらの文化要素は民族の象徴すなわちエスニック・シンボルとして定着している。これらは中国社会から，各「少数民族」に対してそそがれるまなざしのなかに存在する「外側からのエスニック・シンボル」である。

「外側からのエスニック・シンボル」の付与は，中国社会において，新しく創られた「少数民族」の文化要素のうちのあるものが特に注目され，評価されてゆくというメカニズムと密接な関係がある。そしてこれら「外側からのエスニック・シンボル」はいつかフィードバックされて「少数民族」自身の自己認識あるいは，民族自身が集団内部で持つ「内側のエスニック・シンボル」にも影響を与えてゆくと予測される［e.g. 関本 1994:6-7]。こうした意味から，新中国における「少数民族」研究において，彼らに付与される「外側からのエスニック・シンボル」（以下，エスニック・シンボルと略記する）についての理解を深めておくことは重要な課題の一つであると考えられる。

新しく創られた「少数民族」が解放後の中国社会においてどのように姿をあらわし，認知・イメージされるようになっていったか，という問題はまだほとんど明らかにされていない。したがって，今後研究をすすめるための最も基礎的作業の一環として，本稿ではトン族を事例としてとりあげ，そのエスニック・シンボル創成の過程を，主に新聞，雑誌や単行本による報道・紹介をあとづけることによりあきらかにしてゆきたい。そしてその作業をとおして浮かび上がってくる3つの主要な問題点を指摘し，考察を加えてみたい。

I　トン族のエスニック・シンボル

トン族はタイ系民族に属する。タイ系民族は東南アジア大陸部において主要なグループの一つであり，タイを中心にラオス，ベトナム，ミャンマー，また中国そしてインドのアッサムにも分布している。中国領内にはチュワン族，プイ族，タイ族（以上チュワン・タイ語支），トン族，ムーラオ族，スイ族，マオナン族（以上トン・スイ語支），リー族（リー語支）など八民族［《中国少数民族》編写組 1981:585]，約2,300万人（1990年統計）ものタイ系民族が分布している。トン族はタイ系民族の中で最も東北部に位置する。トン族は，政治的には東南アジアの範疇からはずれるものの，民族の系統からみれば，東南アジア大陸部の民族に属するといっても差し支えない［大林 1984:2]。

トン族は1990年のセンサスで人口約251万人で中国の貴州省（約140万），湖南省（約75万），

広西壮族自治区（約29万），湖北省（約５万）に分布する。生業は稲作農耕中心である。自称はカム(Gaeml)あるいはチャム(Jaeml)という。[2] トン語は南と北の二つの方言区に分れる。南部方言区と北部方言区ではトン族の文化の差異が大きいとされている。かつて中国社会においてトン族は苗（ミャオ）族と混同されてきた［鄧 1994:161］。新中国成立直後の時点ではトン族の人口が最も多い貴州省においてさえもトン(族)という民族名は一般には知られていなかった。[3] トン族はきわめて限定されたローカルな文脈において，トン家あるいはトン人と呼ばれ，他の民族集団と区別されていたのである。公式な少数民族である侗（トン）族が誕生したのは1953年のことであった［郝 1994:143］。トン族の生活習俗，文化に関する雑誌，新聞，単行本による紹介は1956年を境に飛躍的に増える。建築，音楽，トン劇，民族文学などの諸文化要素のうち，のちに「風雨橋」と「鼓楼」が突出して注目されてくる。

「風雨橋」とは屋根付きの橋を指す。その内部には，腰掛けが設置してあり，休息や雨宿りや納涼ができ，社交の場ともなる。さらに橋の中には，関聖帝，岳公などの道教系の神がまつられている場合が多い。屋根により風雨を避けることができるので漢語で「風雨橋」と呼ばれるようになったようである。「鼓楼」とはトン族の集落にある集会所で，多くの場合塔状の形態を持つ。以前は太鼓が備えつけられていたことから漢語で「鼓楼」と呼ばれている。『三江県志』（1945年出版）によるとその太鼓は主として，有事の際，村人を集めて会議を開くために鳴らされた［姜 1975(1945):140］。しかし現在三江県の鼓楼には太鼓はほとんどみられなくなっている。トン族の鼓楼は，かつて中国の都市にあった時を知らせるための鼓楼とは異なる。[4] 筆者が調査をした広西壮族自治区三江トン族自治県北部のトン族はトン語で「風雨橋」のことを jiuc，「鼓楼」のことを louc と呼んでいる。老人の中には「風雨橋」という漢語の名称を知らない人もいる。「風雨橋」という呼称はもともとトン語のなかにはなかったのである。[5] 筆者の調査地のトン族は鼓楼や風雨橋を公共施設として捉えている。それらは交通や休息や集会といった利便のために作られる場合もあるし，風水のために作られる場合もある［兼重 1997:52-53］。また鼓楼はそれが存在する集落に住む人びとの総体（公）を代表すると考えられている場合もある。

現在，中国のトン族研究者の間では「トン族文化風習の各種の事象の中で，最もトン族の特色を代表するのはトン族の鼓楼と風雨橋である」［王 1989:1］とか「鼓楼，風雨橋はトン族特

2）トン語のローマ字表記における末尾の一文字は声調を表わす声調符号である。

3）貴州省において，一般の人は，貴州の少数民族については苗（ミャオ），彝（イ），回（フイ）しか知らなかったという［喩 1951:837］。

4）中国には昔鐘楼と鼓楼という時を知らせる建築物があり鐘鼓楼と総称された。鐘鼓楼には宮廷内のものと都市の中心のもの二種類があった。鐘楼には鐘が，鼓楼には太鼓が設けられた。元代以降，鐘鼓楼は都市の一種の公共建築となった［中国大百科全書出版社編輯部 1988:587］。

5）「風雨橋」という言葉自体歴史の浅い新造語と考えられる。本稿では「風雨橋」や「鼓楼」という語の誕生や普及に関する議論については立ち入らないことにする。

有の建築芸術に属すると世の中が公認している」[張柏如 1994:70] などといわれる。鼓楼と風雨橋はトン族の象徴（エスニック・シンボル）として高められて評価されている。日本の研究者の間でも鼓楼や風雨橋からトン族が連想されるようになっている［米山 1980:232；周 1990:106]。現在中国各地に民族文化村，公園などが建設され，トン族のセクションには鼓楼や風雨橋がたてられ，一般の人の目に触れる機会が増えた。鼓楼・風雨橋＝トン族という連想は民族研究者以外にもますます広く受け入れられるようになってきているようである。

ところで，周達生は，トン族の鼓楼と風雨橋を短絡的にトン族特有の物質文化とみなすことを強く批判する。特に風雨橋については実例を挙げて，それが中国に広く分布することを指摘している［周 1990:106]。周が挙げている事例のほかにも，中国各地の旅行記や地方志などを探すと比較的容易に屋根付き橋の存在を確認することができる。現在トン族のエスニック・シンボルとなっている「風雨橋」はトン族に固有な物質文化ではないのである。一方，鼓楼について周はトン族に近接するミャオ族が鼓楼を持つ例を挙げるのみである。中国におけるトン族以外の民族における鼓楼の分布に関しては資料がすくなく，今の段階では他の民族にどのくらいあるかわかっておらず，今後の調査が待たれる。

II　新中国におけるトン族の鼓楼・風雨橋の紹介

新中国が成立したばかりのころは中央政府は非漢民族に関する十分な情報をもっていなかった。1950年から中央訪問団を派遣して言語や風俗習慣の調査を行ったり，国慶節に少数民族代表を北京に呼んだ際に聞き取りを行ったりして，不足していた各非漢民族の情報を収集した。「少数民族」が生まれてもしばらくの間は，中国社会において，いくつかの民族名は耳なれないものであり，まして各民族の実態に関する具体的な情報がほとんどつかめない状態であったようだ。中央に，ある程度情報が収集されると，1956年ごろから各民族の紹介が新聞や雑誌や単行本などの出版マスメディアを通して，地方レベルだけではなく全国レベルで行われるようになり，[6] 中国社会に少数民族像が結ばれてゆく。もちろんそれらは中国社会の草の根まで普及していたわけではなかった。建国当初の中国の新聞は大衆への情報伝達メディアというより，政権中枢と大衆の中間に位置する層，具体的には各級の行政幹部むけのメディアであった［田畑 1989:189]。本稿でとりあげる建築や文化財，民族方面の雑誌や単行本の読者もその分野の専門家にほぼ限定されていたと考えるのが妥当であろう。

6）まとまった形で連載されたものとしては「我国的少数民族簡介」(『光明日報』1956年～1957年)，「本省各民族簡介」(『広西日報』1957年)，「兄弟民族介紹（兄弟民族風土志）」(『民族団結』1957年～1963年）などがある。単行本では1958年『我国少数民族簡介』（民族出版社)，同年『中国少数民族的宗教和風俗』（民族出版社，上巻のみ出版）などがある。

解放以降，特に1950年代から60年代までの時期の主要なマスメディアとしては新聞や雑誌や単行本のほかに，映画，劇，小説，ラジオや学校の教科書など様々なものが考えられる。本稿では，そのうち主に新聞や雑誌や単行本の記述に限定して，それらを整理することにより，トン族のエスニック・シンボル創成に関する言説をたどってゆくことにする。[7]

新中国成立（1949年）後から文化大革命開始（1966年）にいたるまでの間のトン族の鼓楼と風雨橋に関する報道について調べてみると，貴州省，湖南省の地方メディアによるものは見当たらなかった。その反面，広西壮族自治区では『広西日報』という地方新聞による，三江トン族自治県のトン族に関する報道が多いことがわかった。[8] 新聞，雑誌，単行本の1962年までの鼓楼と風雨橋に関する報道を広西の地方性のメディアと全国規模のものにわけ，それぞれ表1，表2にあげた（便宜上1963年以降のものは別記する）。

広西の地方メディアでのトン族の鼓楼・風雨橋の紹介は次のような傾向がある（表1参照）。鼓楼・風雨橋は，民族の特色のある民族建築(b, c)，民族遺産(a)など，当時からトン族という民族の特徴を示す民族建築と捉えられていた。また大躍進の時期のものを除いて，[9] 建築の技術や芸術の水準が高いという肯定的な評価が与えられている(b, g)。

そして広西では風雨橋の紹介はほとんど程陽橋に取材が偏っている。a, f, g では程陽橋が写真や図入りで紹介されている。[10] 程陽橋は，広西壮族自治区の三江トン族自治県の林渓川に架かる大型の風雨橋である。鼓楼はこれと対照的で，繰り返しとりあげられた特定の鼓楼はない。

次に全国的なメディアでのトン族の鼓楼・風雨橋の紹介をみる（表2参照）。広西壮族自治区と湖南省のトン族が主に紹介され，貴州省のトン族の情報が殆ど取り上げられていない。言茂仁による湖南省通道トン族自治県のトン族の紹介[11]（k, l, n, o）と建築学や文化財関係の雑誌や単行本による紹介(p, q, r, s, v)が大きな比重を占めている。

7）映画，劇，小説，ラジオや学校の教科書などの分析は，分析対象となる資料の収集がたいへん困難なので将来の課題としたい。

8）まず少数民族関係の専門索引である『中国少数民族史論文資料索引』と『中国少数民族論著索引』を参照した。次に主要全国紙掲載の記事を拾うために『光明日報索引』『人民日報索引』にあたり，別に『新華月報索引』にもあたった。さらに万全を期すために『全国報刊資料索引』（1955年創刊）にあたった。この索引は『新湖南日報』や『新黔日報』，『広西日報』など省・自治区級に限られるが地方新聞・雑誌もカバーされている。残念ながら記事タイトルをみる限りでは1950から60年代にかけて，貴州省と湖南省の地方の新聞・雑誌でトン族に関すると思われる記事自体が大変少なく，風雨橋・鼓楼関係の情報を含むと思われるものは探しあてられなかった。一方，広西壮族自治区に関しては『広西少数民族文献目録』がでているので，これを利用して落ち穂拾いをすることができた。また文化財と建築学方面の文献にもできるかぎり目くばりした。索引そのものが完璧でないこと，そして個人の力の限界により，まだ少なからず遺漏があると思われるが，主要なものは拾えていると思う。

9）ただ大躍進の時などには，d, e, f，にみえるように，風水という「迷信」に関係するとして，マイナスの評価が与えられた。

10）但し，a と f は程陽橋と思われる写真を使っているが，程陽橋とはとくに断わっていない。

表1　広西の地方メディアでのトン族の鼓楼・風雨橋の紹介

	年　代	紙名，日付	題　　名	著　　者
a	1956年	『広西青年報』(5月19日)	「侗族人民的風雨橋」	唐兆民
b	1956年	『広西日報』(10月4日)	「秋到侗家」	張　谷（本紙記者）
c	1957年	『広西日報』(3月9日)	「本省各民族簡介　侗族」	本報資料室
d	1958年	『広西日報』(5月8日)	「為千斤県奮戦的人們」	記者　王緝国
e	1958年	『広西日報』(7月26日)	「人変了，庄稼也変了」	本報記者　唐振真
f	1961年	『広西日報』(6月17日)	「侗寨素描」	饒　韜
g	1962年	『広西日報』(8月5日)	「程陽橋的建築風格」	区交通庁設計院工程師 楊鉅棣
h	1962年	『広西日報』(12月4日)	「侗族老人話鼓楼」	劉保元，黄承輝， 儂易天，肖玉笛
i	1962年	『広西日報』(12月5日)	「探橋」	鄭光松

表2　全国的なメディアでのトン族の鼓楼・風雨橋の紹介

	年　代	誌・書・紙名，号数・日付，出版社名	題　　名	編・著者名
j	1954年	『文物参考資料』12期(12月)	「応注意保護少数民族文物」	井鴻鈞
k	1956年	『旅行家』5期(5月)	「侗族人民的家郷」	中央民族学院トン語実習組 言茂仁，楊権
l	1956年	『光明日報』(10月12日)	「侗族人民的建築芸術」	言茂仁
m	1956年	『光明日報』(11月2日)	「我国的少数民族簡介九侗族」	無署名
n	1957年	『大公報』(8月21・26日)	「侗郷行」	言茂仁，王翼南
o	1957年	『侗族人民的家郷』 (少年児童出版社)		言茂仁
p	1957年	『中国建築』(文物出版社)		中国科学院土木建築研究所 清華大学建築系合編
q	1957年	『中国古代橋梁』(文物出版社)		唐寰澄
r	1958年	『文物参考資料』3期(3月)	「中国建築概説」	陳明達
s	1958年	『文物参考資料』8期(8月)	「侗族人民的風雨橋和鐘鼓楼」	譚毅然
t	1958年	『我国少数民族簡介』 (民族出版社)	「侗族」	依群（編著）
u	1959年	『民族団結』4期(4月)	「兄弟民族介紹　侗族」	天　英
v	1959年	『中国石橋』(人民交通出版社)		羅　英
w	1961年	『民族画報』6期(6月)	「侗族」	楊　権

総じて風雨橋・鼓楼は民族の特徴を持った建築芸術，文化財と肯定的にとらえられ，トン族を紹介する時によく言及されている。jとtを除いて風雨橋や鼓楼の写真が掲載されており，読者がトン族の鼓楼や風雨橋を具体的にイメージする助けになっている。

言は専ら湖南省通道トン族自治県の坪坦廻龍橋を紹介する。坪坦付近の鼓楼も紹介するが，集中的に特定の鼓楼を取り上げて紹介はしなかった。一方，建築学関係のメディアでは，程陽橋だけがとりあげられ写真入りで頻繁に紹介される(p, q, r, s, v)。しかし鼓楼は紹介されなかった。程陽橋が『中国建築』(p)と『中国古代橋梁』(q)に掲載されたことは，程陽橋が解

11) 北京中央民族学院の学生でトン語実習組のメンバーだった言茂仁が1956年頃，湖南省通道トン族自治県坪坦村にトン語実習に行った時の見聞を紹介している。

放初期から，建築学関係者の間で全国レベルでたいへん高い評価を受けていたことを示す。そして文化財関係者からもトン族の民族文化財としての評価を与えられていた(j)。しかし建築学関係者には程陽橋がトン族のものだとはあまり認識されていなかったようだ。qで広西三江侗族的程陽橋とされた以外は，vのようにトン族の橋と特記されなかったり，甚だしくは僮族（チュワン族，現在は壮族と表記されている）のものと誤認された（pとr)。建築学者，陳明達の事実誤認(r)に対して，広西の譚毅然からすぐに訂正意見がでた(s)。譚毅然は毛南（マオナン)族出身で，広西壮族自治区の博物館関係の役職についていたと思われる少数民族エリートである。彼は，程陽橋はトン族のものであることを指摘した。しかも，風雨橋は広西のトン族だけではなく，湖南，貴州省一帯のトン族に広く分布し，トン族は他にも涼亭や鐘鼓楼などの民族建築も持つことを紹介した。涼亭は道端などに建てられる通行者のための雨宿りや休息のための東屋である。

風雨橋は坪坦廻龍橋と程陽橋が集中的に紹介されたが，鼓楼は特定のものが集中して注目されることはなかった。程陽橋は当時建築学の方では注目されたのにかかわらず，民族学関係者からは，全国的レベルではあまり注目されていなかった。たとえばm, t, u, wではトン族の建築を紹介しているのにかかわらず程陽橋という固有名詞はだされていない。特にuとwは三江トン族自治県のトン族を中心に紹介し，程陽橋と思われる風雨橋の写真が掲載されているが，それが程陽橋だと明記されていない。

1950年代から，国家プロジェクトとして各民族の歴史を書くための準備が行われ始め，トン族に関しては『侗族簡史簡志合編（第三次討論稿)』(1960年）とその改訂版にあたる『侗族簡史簡志合編（初稿)』(1963年）という中間報告的な非公開の資料（中国科学院民族研究所・貴州少数民族社会歴史調査組編）が編纂された。両者とも，固有名詞を挙げて紹介された風雨橋は二つだけで，湖南通道坪坦廻龍橋，三江トン族自治県程陽橋の順に紹介された。その際，前者に比重がかけられ，程陽橋は扱いに差をつけられ軽く触れられるにとどまった。これは程陽橋に対する，民族学関係者の当時の評価を端的に表わしているように思われる。

Ⅲ　程陽橋の知名度の上昇

1960年代に入ると程陽橋の知名度を飛躍的に高める三つの画期的な出来事がおこる。一つは1962年5月15日に発行された「中国古代建築――橋」4種のうちの1種に程陽橋が選ばれたことである。程陽橋は中国の古い有名な橋[12]と肩を並べる別格な扱いをされた。切手には広西

12）河北省趙県安済橋，江蘇省蘇州宝帯橋，四川省灌県珠浦橋の三つ。なお中国でいう「古代」とは清末以前をさす。中華民国初期に建造された歴史のきわめて浅い程陽橋が，清末以前のものと誤認されているということになる。

三江程陽橋とのみ書かれトン族のものだとは示されていない。程陽橋が選ばれた直接の原因については，手持ちの資料の範囲内では不明であるが，『中国古代橋梁』と『中国建築』に写真入りで紹介されたことと無関係でないと思われる。第二に，翌1963年2月26日には広西壮族自治区の重点文物保護単位に指定された。第三に，文化大革命前年の1965年10月20日に著名な文化人である郭沫若が『程陽橋』と題する詩を詠んだ。直接行って見たわけではない程陽橋を，彼が賞賛していることより，当時程陽橋がある程度著名になっていたことが窺われる。ただし詩ではそれがトン族のものだと言明されていない。それ以後，以上の3点は，新聞や書籍が程陽橋を紹介する際，繰り返し引用される。[13] 中央からの高い評価（お墨付き）を得たことによる，程陽橋のステイタスの上昇をこれらの記事から読み取ることができる。

程陽橋が全国的に有名になったのは1950年代に建築学の分野で，何らかの理由でたまたま，屋根付き橋という建築形態を持つ橋のうち程陽橋が注目されたのがきっかけとなったと推測される。中国各地には，程陽橋と匹敵する規模と壮麗さを有する屋根付きの橋は少なからず存在するのである。当時程陽橋がトン族という少数民族のものであるということはあまり知られていなかったようである。1963年以降になって，民族学関係の著名雑誌である『民族団結』や『民族画報』でも程陽橋がトン族の建築文化の代表として写真入りで紹介され，程陽橋はトン族と強く結び付けられるようになってゆく。[14]

文化大革命終了後（1976年以降）も程陽橋に対する追風は続く。1982年2月23日に全国重点文物保護単位（国の重要文化財）に指定される。このことは程陽橋が国家により，正式に「お墨付き」を得たことを意味する。ここで程陽橋はトン族の風雨橋・鼓楼の中で他を圧倒して最も全国的に有名でステイタスの高いものとなった。そして三江トン族自治県のみならずトン族全体を代表する文化要素という扱いをうけるようになってゆく。そのことは1985年に公開出版された『侗族簡史』[15] で程陽橋が巻頭写真の最前列を飾ったこと，しかも2ページをさかれたことに象徴的に現われている。しかし『侗族簡史』では，程陽橋はトン族文化の象徴という言葉で形容されるには至らなかった。

Ⅳ 「鼓楼文化」論の創成

これまで見てきたように1962年以降，程陽橋という風雨橋が突出して有名になり，トン族文

13）例えば1963年4月6日付け『光明日報』掲載の「侗寨叙情」（包玉堂）や1978年8月29日付け『広西日報』「今日程陽橋」（本報通訊員 朱焱）など。

14）『民族画報』の1963年4月号掲載の「侗族建築」と『民族団結』1964年1月号掲載の「侗族的建築」（言茂仁）。

15）これは『侗族簡史簡志合編（第三次討論稿）』（1960年）とその改訂版にあたる『侗族簡史簡志合編（初稿）』（1963年）などの準備段階をへて，国家プロジェクトの成果の一環として正式に公開出版されたものである。

化を代表するというイメージが強力になっていった。にもかかわらず，トン族文化は現在「鼓楼文化」という言葉で表現・代表されている。「風雨橋文化」となっていないのは一体何故なのであろうか。

「鼓楼文化」という概念が提示された背景には，貴州省が1985年に北京で開催した「貴州侗族建築及風情展覧」（以下「展覧会」と略記）の成功がある。「展覧会」が開かれるまでの過程を庄・呉［1985:85-93］，呉正光［1991:264-270］，貴州省文物管理委員会弁公室［1985］を用いて追ってみる。

文化大革命終了後，共産党の十一回三中全会以降，文化財保護政策も復活した。貴州省でも省内の文化財調査をし，都柳江流域でトン族の鼓楼が「発見」された。1982年２月に，いくつかのトン族の鼓楼を省クラスの文化財に指定し，保護の対象とした。続けて都柳江流域のトン族鼓楼と花橋（風雨橋）の悉皆調査を行い分布図を作成した。

1984年10月下旬から11月初旬にかけて北京で開かれる全国民族文物工作会議に貴州省代表として出席する呉正光に，貴州省委宣伝部の責任者が，トン族の鼓楼と花橋（風雨橋）の写真を北京で披露し，各方面に働きかけ北京で展覧会開催の約束をとりつけるように要請した。11月５日呉正光は北京の民族文化宮における「展覧会」開催の契約を結ぶのに成功する。同年12月８日から翌85年１月８日まで，まず地元の貴州省博物館で「侗寨鼓楼図片展覧」を開催した。その際，北京の文化部文物局からの文化財保護研究専門家や，多くの報道関係者を呼び，あわせて鼓楼と花橋（風雨橋）実地調査も行った。それに先立って貴州省委員会宣伝部が記者座談会を行った。２月（旧正月）には，北京から宣伝部，文化部，文物局，民族関係役所，研究所，出版社などの関係者を招いてトン族の鼓楼や花橋を見学させた。北京での「展覧会」開催の前に，貴州省の省都貴陽で建築，民族，文化財部門の専門家を集めて学術討論会を開き，その成果をまとめた『侗寨鼓楼研究』，『貴州文物古跡伝説選』を出版した。５月３日，北京の民族文化宮で中外記者招待会を開き内外の報道関係者に６月開催の「展覧会」を宣伝した。６月１日から一カ月，北京民族文化宮展覧庁で「展覧会」を開催し，会場で『侗寨鼓楼研究』，『貴州侗寨鼓楼風雨橋』などの書籍を販売した。「展覧会」は貴州省向けのローカルメディアだけではなく，全国向けの新聞やテレビでもとりあげられ，全部で50回以上報道された。

北京で「展覧会」を無事に開いたこと以上に，準備の段階で何度も北京の役人や報道陣を招待したり，宣伝活動をして，中央の権威ある専門家から鼓楼や花橋に対するプラスの評価を引き出すことに成功し，それらを地方，全国のメディアに報道させていることに注目せねばならない。例えば85年２月26日付け『貴陽晩報』（貴州省の地方新聞）の記事[16]では北京から来た民族文物考察団がトン族の鼓楼と花橋は我国（中国）の民族建築の珍貴な宝にとどまらず世

16）「民族文物考察団在我省侗族地区考察后認為花橋鼓楼是我国民族建築的瑰宝」

界でも稀にみる芸術の創造であると評価したことが報道された。貴州省のマスコミをうまく使った精力的な宣伝は大成功を収めたと評価できる。

ここで重要なのは，ただ単に貴州省のトン族建築の知名度とステイタスが飛躍的に上昇し，中国社会にトン族＝鼓楼・花橋（風雨橋）という連想が広がったことだけではなく，鼓楼をトン族文化の代表や象徴とみなし，「鼓楼文化」という概念が提唱される契機を得たことである。1985年1月20日付け『光明日報』の記事では，北京から考察に来た専門家が鼓楼をトン族文化の代表と認定したこと[17]を報じた。これをうける形で貴州省文化出版庁の呉正光は『侗寨鼓楼研究』の冒頭で「鼓楼文化」を宣言した[18]［呉正光 1985:1］。呉正光は貴州省の少数民族文化宣伝のキーパーソンであり，中国国内の数多くの新聞，雑誌や単行本に貴州省の少数民族を宣伝・紹介する文章を発表している。彼がトン族ではなくミャオ族出身であることに留意する必要がある。

貴州省は明らかに花橋（風雨橋）よりも鼓楼を重視しアピールしようとしている。それには以下のような理由があると筆者は推測する。貴州省の黎平県，従江県は広西壮族自治区の三江トン族自治県ほどには長くて大型の風雨橋に恵まれていない。逆に三江トン族自治県は鼓楼の数では貴州省の黎平県，従江県にひけをとらないものの（表3参照），両県ほどには，高くて美しい鼓楼に恵まれていないのである。

1985年の北京での「展覧会」の成功を契機に，中国におけるトン族研究の流れがかわる。それまで研究の対象とされていなかった鼓楼が研究の対象になり，鼓楼に関する論文が数多く発表されるようになる。1988年9月には全国侗族鼓楼文化研討会が開催される。学術界における「鼓楼文化」推奨の中心人物として王勝先（故人）が挙げられる。彼は貴州省従江県出身のト

表3　鼓楼・風雨橋の分布

	鼓楼(数)	風雨橋(数)	県内最長風雨橋・長さ	備考	出所
黎平県	231	50余	地坪風雨橋　56m		*
従江県	125	30余	朝利風雨橋　40m	1987年統計	**
三江県	158	108	程陽橋　77m		***

*　［貴州省黎平県志編纂委員会　1989:144］
**　［貴州省従江県志編纂委員会　1991:42-43］
***［三江侗族自治県志編纂委員会　1992:704］

17）彼等は，鼓楼をトン族の村の社会組織の一種の代名詞，トン族の村の団結と興盛の象徴とみなした。また，鼓楼の周りで行われる一連の活動を，トン族の悠久の歴史の縮図であるとみなしている（「有関専家考察黔東南后認為鼓楼是侗族文化的代表」）。

18）呉正光は，「鼓楼文化」と命名する根拠として1，鼓楼は歴史文化の遺存であり，ある程度，トン族の歴史の発展過程を反映する，2，鼓楼は建築文化の精華であり，トン族建築芸術の結晶である，3，鼓楼は民族文化の象徴であり，多方面からトン族の習慣やトン族居住地域の風土人情を展示する，の3点を挙げている［呉正光 1985:1］。

ン族である。王は，トン族文化を鼓楼文化と総括する理由について次のように述べる。「『鼓楼』がただ単に建築芸術の『傑作』ということだけからではなく，さらに重要なのはトン族の日常生活風俗，ハレの日の集会，社会歴史，宗教信仰および，民間文学，芸術などトン族文化を構成する諸側面はみな鼓楼と不可分である。だから鼓楼はトン族の象徴とトン族の村の指標であることよりトン族文化の代表となる」[王 1987：42-46]。風雨橋について彼は次のような見解を述べている。「トン族文化風習の各種の事象の中で，最もトン族の特色を代表するのはトン族の鼓楼と風雨橋である。学術界では常にトン族文化は鼓楼文化といわれる。広西三江トン族自治県文芸連合会主催の刊行物の名称は『風雨橋』雑誌であり，そのことは風雨橋もまたトン族文化風習の代表であることを説明する」[王 1989:1]（下線は引用者による）。彼の後者の説明は鼓楼をなんとか風雨橋より上位に置こうとする強弁であるように思える。貴州省からみると，広西壮族自治区はトン族地区の周辺部にあたる。周辺の広西の風雨橋がトン族文化を代表するのに対するある種の不快感が彼にこういう発言をさせたように思われる。王の唱える鼓楼文化論とは，貴州省のトン族と広西壮族自治区のトン族を差異化し，前者の後者に対する優位性を主張する意図を含むものであると筆者は解釈している。

三江トン族自治県の『風雨橋』に対し，貴州省黎平県では『鼓楼』という刊行物を発行している。トン族居住地域内でこのような省レベルあるいは県レベルでのシンボルの「すみわけ」が行われている。これは，さきほど述べた貴州省と広西壮族自治区の鼓楼と風雨橋の分布の偏差をそのまま反映していると考えられる。

V　中国社会における少数民族エリート

先にみたように，貴州省における一連の動きには呉正光（ミャオ族）や王勝先（トン族）などの少数民族エリートの貢献が大きかった。また広西の譚毅然（マオナン族）の投書も中央および中国社会へのトン族の紹介に貢献している。以下，中国の少数民族エリート＝幹部について若干の説明をする。

地方の少数民族幹部のうちわけは，(1) 新中国成立以前に革命に参加し訓練をうけた老幹部，(2) 新中国成立後，各分野の仕事に積極的に参加した積極分子のなかから抜擢された幹部，(3) 訓練をうけた知識人（それには解放前に教育を受けた人と解放後に教育を受けた人の両方が含まれる）と，(4) 人民と密接な関係をもつ愛国主義的な立場の民族宗教のリーダー，である[《当代中国》叢書編集部 1993:311-312]。解放直後に民族区域自治を行うのに際して少数民族の政治幹部が必要になったので，1950年11月に中央人民政府政務院は「培養少数民族幹部試行方案」を発布し，少数民族幹部育成をうちだした。そのために北京に中央民族学院の他，各地に民族幹部育成のための高等教育機関を開設した。1956年以降は行政幹部以外に，軍事幹部や文化教

育幹部，科学者，芸術家，エンジニアなどの多方面の幹部の養成の必要が毛沢東により提言された［同上書:298］。こうした養成政策の結果，全国少数民族幹部は新中国成立直前には4.8万人だったものが，1966年には80万人に1988年には184万人になっている［同上書:311］。

少数民族地域におかれた少数民族幹部は中央と少数民族の民衆を仲介する働きをしていた。実際，中央に働きかけができるのは省（自治区）クラスのエリートであるだろう。

Ⅵ　少数民族とその居住地に対する偏見

では，なぜ貴州省がそこまで熱心に「展覧会」を開いてアピールする必要があったのだろうか？　ひとつはトン族の建築文化を観光資源としてアピールすることによって貴州省の観光化を促進し，経済効果を狙うことである。しかし，それだけではない。

中国において従来，非漢民族は蔑視の対象であり，彼らの民族名を漢字表記する場合獣鳥虫偏などを当てられていた。一般に非漢民族の居住地域は「瘴癘之地」[19] とされ，居住地に対してもマイナスのイメージが付与されていた。解放前から解放初期にかけて中国共産党は非漢民族＝少数民族への蔑視をできるだけあらため，「少数民族」全体のイメージのプラスへの転換を政策的にはかった。例えば周恩来総理は1951年に少数民族を侮蔑する呼称や地名や石碑，額や対聯の使用を禁止する指示[20] を発布している。また新聞，雑誌でもイメージの転換をはかる報道が行われた。共産党は民族平等をうたったが，実際は，マルクス主義的歴史観の採用により，あらゆる少数民族社会は原始共同体制，奴隷制，封建領主制，封建地主（初期資本）制の4つの基本的発展段階に分類され，少数民族は漢民族の進化段階に達していない弟分と位置付けられた［秋 1955:28；唐 1953:3］。これは民族平等の建て前と自己矛盾し，少数民族の漢民族に対する劣位は解消されなかった［Harrell 1996a:26］。現在でも，漢民族の人々の少数民族に対する偏見や差別は完全に払拭されたわけではない［*ibid.*:25-27］。一方，少数民族の人々の側では自分たちは「遅れており，文明化されておらず，汚く，愚鈍であるなどというスティグマ化されたアイデンティティ」［*ibid.*:6］をもっている。筆者は中国で知り合った漢民族の人から少数民族は遅れているとか不衛生であるという話を何度か耳にした。また三江トン族自治県のトン族の村での調査中，村人は筆者に対して，我々トン族は貧乏で食べ物も良くなく，教育レベルも低く無知であるなど自虐的なことを何度も述べた。

少数民族が住む地域・土地そのものに対してもネガティブなイメージで捉えられてきた。そ

19）瘴癘とは中国南方で流行する悪性のマラリアなどの伝染病をさす。商務印書館『辞源』（修訂本）1986年版による。

20）「中央人民政府政務院関於処理帯有歧視或侮辱少数民族性質的称謂，地名，碑碣匾聯的指示」［人民出版社 1953:11-12］

の中にあって貴州省に対する偏見は特に強かった。貴州省は歴史的に漢民族から「蛮煙瘴雨」の地[21]とされてきた［鄺 1942(1973):364］。貴州省を形容する「天に三日の晴れなし，地に三里の平なし，人に三分の銀なし」という有名な諺が示すように，貴州省は不毛の地とみなされてきた。そして「文化」も欠乏しているとされてきた［張克 1987:251,253］。中国社会において貴州省は，漢民族の住めない条件の悪い土地だからこそ少数民族が住み，少数民族が住む場所だからこそ「文化」がないと捉えられ，特に蔑視されてきたようだ。貴州省が北京で貴州侗族建築及風情展覧を開こうとした意図は上記のようなスティグマを払拭し名誉を得ることが主であったようである。それは1984年12月10日に貴州省文物管理委員会と貴州省文化出版庁が貴州省人民政府あてに提出した報告書[22]に如実にあらわれている。その中には「貴州省は長い間人々から軽蔑されていた。貴州人も軽蔑されていた。多くの人は歴史文化遺産はないと思いこんでいた。ずっと人々から無視されていたトン族の村の鼓楼，花橋などの少数民族建築物は大変高い建築芸術価値と民族文化財の価値を持っている。われわれはこのたび展覧会を行い，貴州を宣伝し，振興させる。この展覧会を首都で開けば，必ず多くの旅行者と民族関係の仕事をする人々を貴州省に引き付けるだろう」とある。

この前年（1984年），貴州省は，北京で「貴州溶洞奇観撮影展覧」という鍾乳洞の写真展を開いている。これは単に鍾乳洞という観光資源を紹介するためだけではなく，貴州省の自然が決して不毛でなく，美しいものであることをアピールすることを目指すものであった［同上書:251］。

貴州省の戦略はその後も続く。1988年1月には貴州省従江県にある増沖鼓楼が第3次全国重要文物保護単位に指定された。増沖鼓楼は中国社会においてあまり有名にならないうちに，国の重要文化財に指定された。その背景には北京での「展覧会」の開催を契機に関係を深めた北京の文化財関係の要人の後押しがあった[23]［呉正光 1991:270］。貴州省は，いまや広西壮族自治区のトン族の程陽橋に対抗できる存在を得ている。

その後1997年6月2日に「トン族建築」という4種一組の切手（鼓楼・風雨橋それぞれ2種ずつ）が発行された。鼓楼の一枚には増沖鼓楼が描かれたのに対して，風雨橋2種の中に程陽橋は入っていなかった。鼓楼，風雨橋ともに貴州省のものだけが描かれたのである。北京の郵電部は，1994年に一部の切手の題材と図案を，省や区や市から推薦されたものの中から採用することにした。その際，貴州省郵電管理局が推薦した，貴州省に関係する5つの題材の中から，

21）「蛮煙瘴雨」は「蟲毒」と「瘴気」の二つの恐るべき要素からなる［鄺 1973(1942):367］。中国南部の非漢民族は蟲毒を放ち人を害し，その住む場所で発生する瘴気を受ければ病気になると信じられていた。

22）「貴州省文化出版庁関於挙弁《貴州侗族建築及風情展覧》和保護少数民族村寨的報告」［貴州省文物管理委員会弁公室 1985］

23）この後押しの詳しい理由は［呉正光 1991］に記載されていないため，現在のところ不明である。

「トン族建築」が採用されたのである［黄 1997:104］。中国では数年来大変な切手ブームなので，切手に描かれたトン族の鼓楼・風雨橋は中国社会で広く知られることになるであろう。貴州省では，貴州省のトン族の鼓楼や風雨橋を題材にした『貴州省侗族建築』という絵葉書セット（1996年7月貴州省郵電管理局発行）やテレフォンカード（1992,94年貴陽市電信局発行）が発売されている。今後，中国社会において鼓楼・風雨橋＝貴州省のトン族というイメージが強くなってくるように思われる。

Ⅶ　中国の少数民族文化財政策

それではなぜ中央の文化財関係者と展示会場を提供した民族文化宮関係者は貴州省の「貴州省侗族建築及風情展覧」の開催を後押ししたのであろうか？　その主な理由は貴州省文物管理委員会弁公室［1985］の記述から次の2点にまとめられる。

(1)　トン族の民族文化財を利用して貴州省に対する従来の偏見を改め，国外の観光客を貴州省に招致できる。また将来海外で展覧会を行うことにより共産党と国家が非常に重視している外貨獲得が期待できる。

(2)　民族文化財の展覧を通して，少数民族を宣伝することにより，人びとに辺彊の少数民族に対する理解を生じさせ差別や偏見を解消させ，また少数民族や貴州省の人びとに自尊心や誇りを持たせることができる。結果として中国における民族文化の交流，民族の平等，民族の団結を実現できる。

(1)のような民族文化財の商品化という考え方は改革開放政策実施以降にでてきたものである。(2)のような考え方は，新中国成立以降の国家の民族文化財政策の流れを汲む（文化大革命時を除いて）ように思われる［e.g. 井 1954；中央民族学院研究部文物室 1955:119；呉沢霖 1957:63］。

1984年10月末から11月初にかけて，北京で開催された中国で初めての全国少数民族文物（文化財）会議（前述）は国家民族事務委員会と文化部が主催したものであった［陳・朗:1984］。この会議に貴州省代表として出席した呉正光が，85年の「貴州省侗族建築及風情展覧」の開催を中央に働きかけたのである。そして会議を主催した民族事務委員会主席の楊静仁主席の少数民族文化財に対する考え方は上記の(2)と，軌を一にするものである［楊静仁 1984］。

Ⅷ　エスニック・シンボルと均質的民族観

これまでトン族のエスニック・シンボルが創成されてゆく過程を見てきた。では，トン族のエスニック・シンボルはその後どのようなかたちで定着していくのだろうか。

鼓楼や風雨橋が中国社会において著名になり，トン族のエスニック・シンボルとみなされるようになると，風雨橋・鼓楼をトン族独自の物質文化と捉え，それによりトン族を他の民族から差異化しようとする言説が数多くでてくる。例えば四川省の酉水の土家（トゥチャ）族のもつ屋根付き橋を，土家族がトン族から学んで来たものであり，しかもトン族の風雨橋に比べて遜色がある［李 1994:192］とする言説がある。これは程陽橋を念頭においた発言であるように思われる。また，トン族居住地域でない湖南省の江永県に，トン族の鼓楼や涼亭に類似する建築物が存在することより，当地の人の祖先がトン族と共通の祖先を持っていたと推定する研究者もいる［張柏如 1994:70］。涼亭はトン族居住地域に数多く分布するが，中国各地にきわめて広く分布する物質文化である。近年中国のトン族研究者の間では鼓楼と風雨橋と涼亭を「トン族建築三宝」の名のもとに一括して，トン族に特有な物質文化としてみなしてアピールしようとする動きがある［楊・鄧 1986:32；郭 1986:45-46］。これらの言説の背景には，広い中国のよその地域の事情を知らずに，限られた知見からのみものごとを判断する「井の中の蛙」的な誤解［周 1990:113］という側面もあるだろう。

しかしそれだけではない。現在トン族の北部方言区には南部方言区に多く見られる鼓楼と風雨橋がみられないが，過去においてトン族居住地域全域に風雨橋・鼓楼が存在していたとみなされている。この理由について秦は，北部のトン族の民族特色が漢化により薄くなったからだと説明する。彼は『玉屏県志』の「南明楼即鼓楼明永楽年間建」という記述や『沅州庁志』の中にある「邑治旧有鼓楼創自弘治年間」の記述に依拠して，過去北部方言区のトン族に南部方言区と同様，トン族の鼓楼があった断定している。しかも彼は南部方言区にある風雨橋も北部トン族地域に昔はあったこと，また涼亭が北部に現在も多く存在していることから，南北が昔は同じ文化を持っていたと主張する［秦 1991:165-169］。秦の説には，積極的な根拠はまったくなく説得力に欠ける。まず，風雨橋や涼亭はトン族独自の物質文化でない。さらに，彼が歴史文献から引用している鼓楼の事例は，明らかに中国の城内にかつて広く存在した鼓楼であり，トン族の集落にある鼓楼とは別ものである。それにもかかわらず，1980年代に民族成分の回復と改正のために民族識別の補充調査が行われた時にも，貴州省の銅仁市と湖南省会同県において，前述の泰と類似する論法が採用され，鼓楼，風雨橋や涼亭が，民族識別調査の被調査者をトン族であると判定する際のいくつかの根拠のうちの一つとして使われた。

このような現象はなぜ生じたのであろうか。それには中国における民族理論の背景がある。なぜなら民族識別の基準となったスターリンの民族の四つの定義は(1)共通の言語，(2)共通の地域，(3)共通の経済生活，(4)共通の文化にもとづく共通の心理［費 1986(1980):11-15］である。それは同一民族であると確定された民族集団の内部の共通性（均質性）を強調するものであり，中国の民族学者の間におけるきわめて一般的な考え方となっている。今まで紹介した中国におけるトン族の鼓楼や風雨橋に関する言説は，全体的に以上の傾向を帯びているように

思われる。

いっぽう近年スターリンの民族の四つの定義の運用が必ずしもすべての民族に対して厳格に科学的に行われたのではないという批判がアメリカの人類学者たちによって提出されている［Harrell 1996b:66,82；Diamond 1996:92；Mckhann 1996］。この批判は，中国の公定55少数民族の枠組み自体の（中国側の主張する）「科学性」を懐疑する。それが正しいとすれば，中国における同一民族内部の均質性の強調は，二つのレベルにおいて民族の実態とかけ離れた民族の虚像をつくりあげてしまう危険性をはらんでいるということになる。トン族に関しても今後十分吟味することが必要であろう。

おわりに

以上行ってきた作業から浮かび上がってきた問題点のうち，主なもの三つに関してまとめてみたい。

1．中央と周辺の間の垂直的な相互関係

従来，中国において中央（漢民族）と周辺（少数民族）の間には，中央（国家）の圧倒的優位による非対称的な力関係のヒエラルキー構造［Harrell 1996a:4］が指摘されている。また民族に付与されているイメージやエスニック・シンボルは，各民族の文化要素の中から，中国の文化的多元性のシンボルとして好ましく，政治的に無害な要素を，上（国家）が選択して構成されたものであるという見方がなされてきた［長谷川 1991:90,91；Bjørn 1994:11］。本稿で紹介したトン族の事例では，貴州省のエリートによる，下からの中央に対する上むきの強いアピールがなされ，それに対して上からのサポートも行われた。中央と地方エリートの相互交渉のなかでトン族のエスニック・シンボルが創成されたことに注目する必要がある。

新中国成立以降も，少数民族に対してのみならず，彼等が居住する地域に対しても，漢民族や中央から付与されてきた偏見がある。またそれに起因するスティグマ化された民族アイデンティティと地域アイデンティティがある。そこで地方は中央に働きかけ，そこから肯定的な評価（お墨付き）を得ることを必要とした。国家からの鼓楼や風雨橋＝文化財という評価，その証としての国家の重要文化財への指定は，貴州省にとって，スティグマ化されたアイデンティティを払拭する契機となった。中央は少数民族文化に「お墨付き」を与えることにより，多民族国家における各民族の団結をはかろうとする。現在は，少数民族文化を利用した観光による経済効果という側面からも，中央と周辺の両者の相互関係はますます緊密になってきているように思われる。

2．各「地域」を単位とした水平的な相互関係

貴州省が中央にトン族文化を宣伝，アピールしようとしたのは，必ずしもトン民族自身の「民族アイデンティティ」に動機づけられたものではなかった。むしろ，行政区画である貴州省という「地域」（行政区画にもとづく「地域」とそれに限定しない地域を鈎括弧の有無で区別することにする）をアピールするためにトン族文化を利用したのであった。それは「『地域』アイデンティティ」に基づくものであるので，トン族エリートによって行われなければならない必然性はなかったのである。

ひとたび貴州省のトン族の鼓楼に対する評価が高まると，貴州省のトン族知識人はその流れに追随し，広西壮族自治区のトン族に対する貴州省のトン族の優位性を主張しようとする。トン族エリートたちの間には，我われは国家が公認したトン族という民族に帰属するという「民族アイデンティティ」が存在する。しかし同時にそれぞれの「地域」に帰属するという「『地域』アイデンティティ」ももっている。その両者が交叉したところに，我われは貴州省のトン族であるという帰属意識，広西壮族自治区のトン族であるという帰属意識，あるいは三江トン族自治県のトン族であるという帰属意識としての「『地域』的民族アイデンティティ」が生ずると考えられる。

人類（民族）学者は，民族集団やその支系を単位に民族アイデンティティやエスニシティを強調し，民族と民族の間の関係＝「民族間関係」に注目しがちである。本稿で示したトン族の事例は，中国の少数民族の人類（民族）学研究に，「地域」の間の関係としての「『地域』間関係」，そして「『地域』間関係」と「民族間関係」の両者が交叉したところに生じる「民族内『地域』間関係」（同一民族集団の各行政区画間における民族内部の関係）といった視点から民族を捉えてゆく方向性の有効性を示唆する。

従来，中央（漢民族）と周辺（少数民族）を二極的に対置させ，両者の垂直的な関係を過度に強調することにより，周辺や少数民族は十把一絡に扱われ，それぞれの内部にある「地域」間の相互関係が見過ごされがちであったように思われる。中央と周辺の垂直的な相互関係という縦糸と，周辺内部の各「地域」を単位とした水平的な相互関係という横糸の両者を織りあわせる視点が必要であると考える。

3．均質化と差異化

民族識別の結果，「少数民族」の境界は不変のものとして固定化され，かつ集団内部での均質性が強調される。付与されたシンボルは，同一民族として囲い込まれた集団である各少数民族を特徴づけ，他の民族と区別するエスニック・マーカーの代表格とされる。鼓楼や風雨橋という，トン族文化における地域的な文化要素をトン族全体の文化要素にふえんすることにより，地域差（内部の差異）を消し，単一の均質的トン族像を形成しようとする操作が行われた。一方，

風雨橋をトン族のエスニック・シンボルとする評価が定着すると，それはますますトン族「独自」の物質文化とみなされ，涼亭までとりこまれる。

民族識別の適用の科学性が懐疑されている現在，各民族のエスニック・シンボルが各民族に囲いこまれている人びとの実態を正しく代表しているという保証はますます危ういものになっている。それにもかかわらず，確立したエスニック・シンボルは実際のところ民族に対するまなざしに大きな影響を与えている。

現在，トン族内部の均質性を強調しようとするベクトルと，トン族文化の「地域」差を強調しようとするベクトルという異質な二つの力が共存しているのである。

以上の諸問題は中国の諸民族において決してトン族だけにあてはまる特殊な問題でないと思われる。そればかりか，いくつかの問題点は政治体制や民族政策の違いを超えて，東南アジア大陸部の各国において，程度の差こそあれ共通しているのではないかと予測される。今後東南アジア大陸部の各国の政府による「民族」の認定と紹介，そして各国社会における「民族」への評価やまなざしの創成の過程を詳しくあとづけて比較検討することが必要であろう。

謝　辞

本研究をまとめる過程における筆者の口頭発表において，また草稿に目を通していただき，有益なコメントをしていただいた方々，及び筆者がトン族と出会うきっかけを与えて下さった宮下繁氏，トン族の切手，絵葉書，テレフォンカードの実物とそれに関する情報を提供して下さった宮内慎太郎氏，そのほか筆者を助けて頂いたすべての方々に深く感謝いたします。

また拙稿で紹介した広西壮族自治区三江トン族自治県のトン族の鼓楼と風雨橋に関する知見は，筆者の中国留学中（94年6月から96年6月まで）の調査で得られたものである。筆者の留学受け入れ先の広西壮族自治区社会科学院，ならびに2年の留学期間のうちの前半の1年間，研究助成金を提供していただいたトヨタ財団と庭野平和財団に，記して感謝の意を表わしたい。

最後に，拙稿を筆者の中国留学中に急逝された恩師・故青木伸好教授の霊前にささげ，生前に賜わった学恩にたいし感謝の念を表わすと同時に御冥福をお祈りしたい。

引用・参考文献

（表，脚注，一部本文で示した新聞・雑誌記事については，紙幅の関係上ここでは省略する。また参考にした中国の資料のうち公開出版されていないものは故意に出典を明示していない場合がある。御了承願いたい。）

日本語文献

長谷川清．1991．「『伝統』の改革――タイ族の文化変化をめぐって」『聖徳学園岐阜教育大学紀要』第21集：75-99．

兼重　努．1997．「中国の少数民族トン族における風水思想の受容」『人環フォーラム』第3号：52-53．

大林太良．1984．「東南アジアの民族文化」『民族の世界史6　東南アジアの民族と歴史』大林太良（編），2-18ページ所収．東京：山川出版社．

関本照夫．1994．「序論」『国民文化が生まれる時』関本照夫；船曳建夫（編），6-32ページ所収．東京：リブロポート．

周　達生．1990．「物質文化の交流と情報の伝達者」『住宅建築』4月号：106-113．東京：建築資料研究社．

田畑光永．1989．「『党の代弁者』からの脱皮を目指すマス・メディア」『岩波講座現代中国第3巻　静かな社会変動』180-212ページ所収．東京：岩波書店．
横山廣子．1990．「『土』のカテゴリーからの離脱――白族の本主信仰をめぐって」『文化人類学8』86-97ページ所収．京都：アカデミア出版会．
米山俊直．1980．「貴州紀行」『季刊人類学』11(4):221-247．

中国語文献
《当代中国》叢書編集部（編輯）．1993．『当代中国民族工作 上』北京：当代中国出版社．
鄧小平．1994．「関於西南少数民族問題」『鄧小平文選第一巻』161-171ページ所収．北京：人民出版社．
費孝通．1986(1980)．「関於我国民族識別問題」『民族理論和民族政策論文選 1951-1983』1-24ページ所収．北京：中央民族学院出版社．（初出『中国社会科学』1980年1期）
鄺充．1973(1942)．「説『蛮煙瘴雨』」『貴州苗夷社会研究』陳国鈞等（著），364-378ページ所収．貴陽：貴陽文通書局．台北：東方文化書局．リプリント版．
貴州省文物管理委員会弁公室（編）．1985．『貴州文物』1985年1期．
貴州省従江県志編纂委員会（編）．1991．『従江県志（分纂稿）第三篇　民族』．
貴州省黎平県志編纂委員会（編）．1989．『黎平県志』成都：巴蜀書社．
郭長生．1986．「侗家建築“三宝”及伝説」『民族文化』2期：45-46．
郝時遠．1994．『中国的民族与民族問題――論中国共産党解決民族問題的理論与実践』南昌：江西人民出版社．
黄才貴．1997．「従文化経済学看侗族建築文化的位移」『貴州民族研究』1997年4期：100-108．
姜玉笙（編纂）．1975(1945)．『三江県志』台北：成文出版社リプリント版．
井鴻鈞．1954．「応注意保護少数民族文物」『文物参考資料』12期：116-118．
梁敏．1980．『侗語簡志』北京：民族出版社．
李星星．1994．『曲折的回帰　四川酉水土家文化考察札記』上海：上海三聯書店．
秦秀強．1991．「略談侗族南北地区伝統文化的差異及其成因」『侗学研究』侗学研究会（編），165-171ページ所収．貴陽：貴州民族出版社．
秋浦．1955．『我国的民族政策』北京：通俗読物出版社．
人民出版社（編）．1953．『民族政策文献彙編』北京：人民出版社．
三江侗族自治県志編纂委員会（編）．1992．『三江侗族自治県志』北京：中央民族学院出版社．
唐振宗（編著）．1953．『中国少数民族的新面貌』北京：生活・読書・新知三聯書店．
王勝先．1987．「鼓楼文化――当今典型的越文化」『黔東南社会科学』1987年1期：45-49．
_____．1989．『侗族文化与習俗』貴陽：貴州民族出版社．
呉沢霖．1957．「関於少数民族文物的一点認識」『文物参考資料』1957年4期：63-65．
呉正光．1985．「“鼓楼文化”試探」『侗寨鼓楼研究』1-9ページ所収．貴陽：貴州人民出版社．
_____．1991．「回憶北京侗展――鼓楼和風雨橋」『貴州少数民族文史資料専輯』貴州省政協文史資料委員会（編），264-270ページ所収．北京：中国文史出版社．
楊艾湘；鄧星煌．1986．「試談侗族建築芸術美」『民族文化』6期：32-34．
楊静仁．1984．「尊重知識，尊重人材，做好少数民族文物工作」『民族団結』12期：2．
喩世長．1951．「参加中央西南訪問団調査貴州兄弟民族語言的工作報告」『科学通報』2巻8期：837-846．
張柏如．1994．『侗族服飾芸術探秘（下）図紋篇』漢声71．台北：漢声雑誌社．
張克．1987．「従“洞展”到“侗展”」『貴州真山真水行』251-257ページ所収．貴陽：貴州人民出版社．
陳雁；朗傑．1984．「全国少数民族文物工作会議在京閉幕」『人民日報』1984年11月3日．
中国大百科全書出版社編輯部（編）．1988．『中国大百科全書　建築　園林　城市規劃』北京：中国大百科全書出版社．
《中国少数民族》編写組．1981．『中国少数民族』北京：人民出版社．
中央民族学院研究部文物室．1955．「民族文物図片展覧簡介」『文物参考資料』1955年8期：115-119．
庄嘉如・呉正光．1985．「一股“鼓楼熱”在貴州高原興起――回顧《侗寨鼓楼図片展覧》，展望《貴州侗族建風情展覧》」『侗寨鼓楼研究』貴州省文管会弁公室，貴州省文化出版庁文物処（編），85-93ページ所収．貴陽：貴州人民出版社．

英語文献

Bjørn, Henrik. 1994. Ethnicity and the Local Response to State Minority Policies: From Fieldwork in a Dong Nationality Village in the Southern Chinese Province of Guanxi. In *Copenhagen Discussion Papers* No.23, pp.1-20. Center for East and Southeast Asian Studies Univ. of Copenhagen.

Diamond, Norma. 1996. Defining the Miao Ming, Qing, and Contemporary Views. In *Cultural Encounters on China's Ethnic Frontiers,* edited by Stevan Harrell, pp.92-116. Hong Kong: Hong Kong University Press.

Harrell, Stevan. 1996a. Civilizing Projects and the Reaction to Them. In *Cultural Encounters on China's Ethnic Frontiers,* edited by Stevan Harrell, pp.3-36. Hong Kong: Hong Kong University Press.

_____. 1996b. The History of the History of the Yi. In *Cultural Encounters on China's Ethnic Frontiers,* edited by Stevan Harrell, pp.63-91. Hong Kong: Hong Kong University Press.

_____, ed. 1996. *Cultural Encounters on China's Ethnic Frontiers.* Hong Kong: Hong Kong University Press. (Harrell, Stevan, ed. 1994. *Cultural Encounters on China's Ethnic Frontiers.* Seattle: University of Washington Press.)

Mckhann, Charles F. 1996. The Naxi and the Nationalities Question. In *Cultural Encounters on China's Ethnic Frontiers,* edited by Stevan Harrell, pp.39-62. Hong Kong: Hong Kong University Press.